

第3回優秀賞(銀の星賞)受賞作品

# 「ジイちゃんは僕のヒーローで」

北海道根室高等学校 一年 小林菜々絵



賢治のまちから  
高校生★童話大賞



2003 『賢治のまちから高校生童話大賞』 受賞作品

優秀賞／銀の星賞

『ジイチャンは僕のヒーローで』

北海道 道立根室高等学校 一年 小林 菜々絵

幼い時、まだ僕が十にもなっていない時、祖父はヒーローだった。

遠方に住んでいてごく偶にしか会えなかったけれど、長時間車に揺られた後、

じわじわと蟬が鳴く林を突っ切れば、そこはいつも時間が止まったままの祖父の家があった。玄関は昔ながらの引き戸で、すぐ横にある靴棚には片目しかな

いダルマや名も知らない野生の黄色い花、鳥のはく製などが無理矢理一列に並べて置いてある。全くバランスの悪いそのセンスも、祖父だから許せた。

「今年も来たなあ、ケン坊」

玄関で大声を出せばリズム感の無い足音をたてて祖父が現れる。

ケン坊、とは僕と祖父だけで通じるあだ名のようなものだった。ここに来る前に母に「絶対失くすんじゃないよ」とすごい形相で言いつけられた手紙を祖父に渡し、一週間分の着替えが入った旅行カバ



賢治のまちから  
高校生★童話大賞

ンの取っ手をしっかりと握りしめながら靴を

脱いで中へ入る。手紙をポケットに入れた祖父がその荷物を笑いながら、歳の割には強い力で僕の手から取り、僕が寝泊りする部屋まで持っていく。これが、僕が祖父の家に行った時の、言ってしまった儀式のようなものだった。

一息ついた後は、祖父は必ず一度着替える。半袖のシャツと半ズボンという

動きやすい格好になり、虫取り網や釣り道具という僕たちの遊び道具を持ち出してきて、長旅で疲れている僕の背を思いつきり叩くと、こう言うのだった。

「ケン坊、今年の魚はでっかいぞ」

「かぶとは昨日、砂糖水を塗っておいたからな、集まってる頃かもしれない」

「昼飯は、あれだ、畑の野菜だ。うちのは生が一番美味いって、ケン坊も知ってるだろう？ 今年はいつにも増して豊作だあ」

その度に僕は期待に胸をふくらませながら、大きく一つ頷く。実際、祖父の釣や虫取りの技術は大したもの、こう言ったらなんだが、友人達のお祖父ちゃんよりも偉く見えた。都会とは違う自然の空気を深く吸い込んだ祖父の体はたくましく、背筋なんてしゃんと真っ直ぐで。自慢の祖父だった。僕は祖父のような大人になりたか



賢治のまちから  
高校生★童話大賞

った。

「ごめんなあ、ケン坊。今日はジイチャン遊べないんだわ」

ある年、意気揚々と祖父の家に向かった僕を、祖父は出迎えてはくれなかった。玄関にぼつんと一人で佇み、遠くにも近くにも聞こえる蟬の声をどこか別の世界の音のように感じながら、ひたすら祖父を待った。ジイチャン。しかしとうとう耐えかねて大声でそう何度も呼ぶ。ケンぼう。祖父の声だった。もやもやとした心が一気に晴れ、喜々としてバラバラに靴を脱ぎ捨てると僕は荷物も玄関に放って、勢い良く祖父の部屋まで駆け出した。祖父の部屋は、細長い廊下の一番奥にある。いつもなら閉まっているドアがまるで僕を誘い込むように半開きになっており、けれどそんな事僕は気にも留めないままギイと引く。

「ジイチャン！」

僕の目に飛び込んだ光景は、信じがたいものだった。

一枚の薄っぺらい布団。薄暗い室内。湿気を含んでじんめりとした畳。思えば祖父の部屋に入ったのはその日が初めてだった。僕はその、妙な生活感のある部屋に思わず身を縮める。のどが、チリチリ変な音をたてた。

「ケン坊、ケン坊」



祖父は布団の中で横たわり、うなされたように僕の名前を呼んでいた。何だか泣きそうになってしまい、くしゃり顔を歪ませて祖父の枕元に座り込む。ぽかんと開いた口、天井をぼんやりと見つめた目、くすんだ肌の色。僕のヒーローは変わり果てた姿になっていた。

「ごめんなあ、ケン坊」

今日はジイチャン遊べないんだわ。かすれた声で祖父が言う。そんな事はどうでもよかった。何もできない自分自身が腹立たしく、情けなかった。その間にも祖父は荒い息を吸ったり吐いたりしている。ようやく我に返った僕は、もたつく足を引き摺るようにして歩きながら、茶の間の黒い重みのある電話を手に取り、母に電話をかけた。

「ジイチャンが、ジイチャンが死んじゃうよう」

泣きじゃくりながら話す電話越しの僕に異常を察し、母は「すぐにそっちに向かうから」と早口で告げて早々に電話を切った。それから数時間、僕は祖父の部屋に行くこともできず、「ケン坊、ケンぼう」と僕を呼ぶ声にうめくように泣きながら両手で力一杯耳をふさいでいた。不意に玄関のドアが開く音がする。続く走るような足音の後、茶の間のドアが思いっきり開かれた。

「お祖父ちゃんは」

すごい剣幕で母がやってきた。目がうさぎのように真っ赤になっ



賢治のまちから  
高校生★童話大賞

ている。遅れて父も姿を見せるが、その顔は僕の知っている厳格な父の顔ではなくて、まるで僕より小さな子どものような顔だった。無言で、ひいひいと鼻をすすりながら祖父の部屋を指差す。母は僕なんかすつかり目に入っていない様子で祖父の部屋のドアを開け、父はその場にへたり込んでしまっていた。

その先の事はよく覚えていない。けれど母が僕以上に大声で涙を流しながらどこかに電話をかけていた。父は人形のように床にうずくまったまま「神様、神様」とぶつぶつ呟いていた。僕はと言えば、結局それ以上祖父の姿を見る事ができなくて、数十分後にやってきた救急車に運ばれる毛布の塊のようになった祖父を（あんなのジイちゃんじゃない、あんなの僕のヒーローじゃない）と必死で否定した。それだけが、僕の心を保つ方法だった。

数日後、祖父の家で皆黒い服を着てうつむいていた。甘いような、鼻に残る線香のにおいがとても嫌だった。

「元々お病気だったんですって」

誰かが言った。こっそりと隣のおばさんに耳打ちをしていたようだったが、僕の耳にしっかりと聞こえるほど声は大きかった。

「まあ、それじゃあお一人で大変だったでしょうに。別々に住んでたんでしょ？」

「でもねえ、故人も頑固だったから。『絶対に都会は嫌だ』って言



ってきかなかつたらしいわよ。気持ちには解るけれど」

「年一回来るお孫さんだけが唯一の楽しみだったんですって。富田さんとこの娘さんが、よく話を聞いていたらしいわ。」

言って、二人は僕の顔を見る。目が合うと、慌てて視線を逸らして「そうそう、それでね」とごまかすように会話を続けた。僕はカチカチと小刻みにふるえる歯を両手でおおって隠しながら声を殺して泣いた。

僕が、殺した。

僕がジイチャンを殺したんだ。

僕が、僕が。

あんなに呼んでいたのに。

ヒーローが負けるのを見たくない。

それだけの理由で、知らんぷりした。

ジイチャンは一生懸命戦っていたのに。

誰かが優しい手で僕の背をさすってくれた。誰かは解らなかったが、何だかとても温かい懐かしい手のひらだった。

僕は、夏休みに祖父の家に行かなくなった。祖父を思い出すことも必死でさけていた。僕の中で、だんだん祖父の影が薄れているのを感じながら、けれどそれを止めようとは決してせずに記憶のゴミ箱に祖父を、捨てた。



賢治のまちから  
高校生★童話大賞

そうして三十年も経った今。

僕は、三十九になっていた。

「暑い」

額に浮き出る汗のつぶを袖で器用に拭う。恥ずかしながら腹にわずかながら贅をつけた僕は汗っかきなのだ。みてくれは細身なのだが、着痩せ、というやつである。僕の住んでいる所は決して涼しい所なんかじゃあないが、少なくとも普段室内にこもって仕事をしている体はこの暑さがお気に召さないらしい。

そして、心は不安定にもやを抱えていた。懐かしいはずの景色に、かき乱されるようだった。三十年ぶりの田舎。いつも鳴いていたはずの蝉の声は聞こえないし、畑はぼうぼうに草が伸びただだのやぶになっていたが、それだけはしっかりと形を残していた。

祖父の家。時間の止まった建物。

本当にそこだけ空気が違うようだ。特に目的があって来たわけではない。ただ、このまま記憶を埋めておくべきなのか、悩んだのだ。

ここに来れば、何かが結果が出る気がした。

しばらく口を半開きにしてじーっと穴が開くほど見つめていたが、意を決してドアをカラカラと開ける。湿った木のおいが鼻をつき、自然と喉がなった。





賢治のまちから  
高校生★童話大賞

ドアのすぐ傍には靴棚。その上にはセンスの悪い置物。本当に全く手をつけられていないらしい、幼い頃僕の見ただてのものが、そこにはあった。祖父は、いない。

「ジイチャン」

答えが返ってこない事は十分に解っていたが、呼ばずにはいられなかった。

それは祖父と僕の儀式。ケン坊、と声が聞こえた気がした。靴を脱いで中にかかる。薄くほこりの膜がはった廊下を歩けば、窓から差す光に照らされたほこりがふわりふわり舞い上がり、まるで星屑のようであった。

茶の間、キッチン、順繰りに家の中を見て回る。茶の間は昔と変わらないままそこにあったが、キッチンだけは酷い有様だった。水周りの所はやはり、仕方ないようだ。あえてそうしていたのか自分でも解らなかったが、最後に祖父の部屋が残った。ドアノブに手をかけ、息を呑む。正直迷った。このドアを開けてしまえば、もしかすると僕は後悔するかもしれない。なぜかは解らないがそう感じた。だが、ここで覚悟を決めなければ僕は一生祖父との思い出を思い出せないかもしれない。そう思うと怖くなり、恐る恐るドアを開ける。

取り分け大きな変化はなかった。線香のにおいもとうの昔に消え去り、古い木材のにおいだけが空気中を漂う。歩けば、湿った畳が



賢治のまちから  
高校生★童話大賞

ふにやりと曲がった。足が埋まってしまいそうになりながらも、室内をぐるりと見回しながら奥へ奥へと進んでいく。と、目の前に一つの木箱を見つけた。せんべいの缶ぐらいの大きさだ。それは色がまだらなダンスとひね曲がった机の間に隠すように置いてあって、僕の関心を一気に引いた。これは、なんだろう。首をひねりながら手に取り、軽く振ってみる。カサカサと音がした。何かが入っているらしい。僕は好奇心に後押しされながら、期待の眼差しでそれを開けた。

そこには、一冊のノートがあった。

相当古い物で、臙脂色だったらしい表紙はすっかり色を失くし、紙も黄色だ。多少拍子抜けしながらそれを取り出し、木箱を床に置く。そこで思いついた。これは、もしかしたら祖父の日記かもしれない。ドキドキした。これを読む事はいけない事だ、けれども、何か大事なものが隠されているかもしれない。祖父と祖父から見た僕が、そこに描かれているかもしれない。(ジイチャン、ごめん) 心の中で謝罪し、表紙を開いた。

『五月十日。』

辰雄から電話が入った。内容は健志を此方によこしても良かった。良かった。



勿論私は二つ返事で了解し、夏休みに我が家を訪れる孫の顔を  
思い返していた。

けど、一つだけ不安がある。

はたして、私の体その日までもってくれるだろうか？

実は、辰雄にも言っていないが最近どうも調子が悪い。息切れ  
がする。足腰が刺されたように痛い。前々から持病はあったが、  
精々足が不自由な程度でここまで不具合を感じた事はなかった。  
怖くないと言ったら嘘になる。

けれど、今夜は寝てしまおう。明日になれば何か変わるかもし  
れない。』

目を疑った。いつも気丈でたくましい、朗らかな祖父がこんな弱  
音を吐いているなんて。驚くと同時に、最悪にも軽蔑の念まで抱い  
てしまったくらいだった。眉を寄せながら続きを読む。そこには段々  
と祖父の体が衰えていく様、それに対し恐怖が募る様子が刻々と書  
かれていた。そして、最後のページ。これ以降は何も書かれていな  
い、白紙のままだ。初めの頃の達筆な字体は酷く崩れ、みみずが這  
うような文字が右へ左へと流れていく。

『八月四日。』

明日は健志が来る日だ。いつも通りケン坊、と迎えてやりたい



賢治のまちから  
高校生★童話大賞

が無理な様だ。今、こうして日記を書いているのも辛い。きつと、もうすぐ私の迎えがくるんだろう。御免なあ、ケン坊。ジイちゃんもう駄目だ。来年は遠出をしようと言ってたのに、御免なあ。この日記が健志に読まれる事を願って、最後に私信を残しておく。

ケン坊、いつか言ってたよな。「ジイちゃんは僕のヒーローだ」と。ジイちゃん、吃驚したけど本当に嬉しかった。愛される事の喜びは、ケン坊からもらったよ。だからジイちゃん、頑張ったんだ。もっと、もっとケン坊に愛されたくて頑張った。ケン坊の言葉にはそれだけ強い力があつたんだ。だからケン坊、泣くな。強い心を持て。そしていつかお前に子どもや孫ができた時、精一杯愛してやれ。

今度はお前が、ヒーローになる番だ。

安田勝彦』

最後の名前、祖父の名前。その隣にまあるい水が落ちた痕が残っていた。それは、そう、涙の痕のような。重なるようにして、ポツリポツリ、雫が落ちる。

僕の涙だった。年甲斐もなく、呻きながら泣いた。声はあげまいと喉をぐっと押さえながら。



ふと、背中を何かが撫でた。風のような、いや違う、それは手のひらだった。

肩をふるわせて涙を流す僕の背を、やんわりやんわり、優しい手のひらが擦ってくれるのだ。そこではっと思いついた。その時は特に何も思わなかったし、今の今まで忘れていたような事。祖父の葬式の日、幼い僕の背を優しく撫でてくれた手のひらがあった。今みたいに声を殺して、罪の意識に、自分の不甲斐無さに泣いていた僕の背を、大きくてごつごつした手のひらが撫でてくれたのだ。

「ジイチャン」

蚊の鳴くような声で呼ぶ。答えるように、背を手のひらが軽く叩く。やっと確信を持てた。この手は、祖父だった。懐かしい、たくましくも指がしっかりと伸びた、祖父の手のはらだった。どうして気付かなかったんだろう。あの日からずっと、祖父は僕を見守ってくれていたのだ。

とうとう僕は大声を出してわんわん泣いた。こんなに泣いたのは何十年ぶりだろう。涙で目が溶けてしまいそうなほど泣いた。手のひらはいつの間にか消えていたが、祖父の優しい気配だけはいつまでもそこにあった。

泣き腫らした目をし、片手に日記帳を大事そうに抱えながら田舎



賢治のまちから  
高校生★童話大賞

道を歩いていた僕を呼び止めたのは、初老の女性だった。優しそうな目元と白い肌が印象的な、女性だ。

「健志君かい？」

僕は目を丸くして後ろを振り返る。すると女性は安心したように息をついて柔らかく笑顔を作った。

「やっぱり。懐かしいねえ、もうワタシの事なんて覚えていないだろ？」

からかうような口調で言われたが、本当に思い出せなかった。よほど僕が渋い顔をしていたのか、おかしそうにカラカラと笑うと、既に遠くになった祖父の家の方向を見つめながら口を開いた。

「昔、よく菓を届にアンタのお祖父ちゃんの家に行ったんだよ。ワタシはこの道を曲がった所にある診療所で看護婦をやっているねえ、富田っていうんだけど。よくアンタの自慢話を聞かされてねえ、どんな子かと思えば細っこい都会っ子で。まあ、今じゃ十分立派になっちゃったみたいだけれど顔は変わらないねえ」

雪崩のように記憶が甦る。そういえば、思い出した。久江お姉ちゃん。僕がそう呼んでいた、若い看護婦さんがいた。確かその人の名字は、富田。富田久江。納得したように頷くと、久江さんは満足そうに微笑んだ。

「お祖父ちゃん、残念だったねえ、あんなにアンタを可愛がって



賢治のまちから  
高校生★童話大賞

いたのに。

今じゃあ家もあんなになっちゃって。家を見にきたんだろ？ ちよつと無駄足だったねえ」

「いや、そんな事はありませんよ」

僕が即座に否定すると、驚いたように目を丸くして、首をひねる。

「だってアンタ、あんなボロ家だよ？ あれじゃお祖父ちゃんの魂だって救われないよ。庭も畑もぼうぼうに草が伸びて、家だっていつ崩れるか解らない。見るだけ無駄だろ？」

あんまりふしぎそうに久江さんが言うものだから、途端におかしくなって軽く笑ってみせた。更に首をひねる久江さんを置いて、僕は話し出す。

「祖父は几帳面な人ではなかったから、そんな事気にする性格じゃないですよ。それに祖父はもうあの家にはいません。ずっと、ずっと昔から、僕の事を見守ってくれていたんです。だって」

そこで一旦言葉を切る。そうして、満面の笑みを浮かべながら、いつも言っていたあの言葉を言うのだ。僕の心がこの体を抜けて、幼い頃の姿に還る。祖父が照れ臭そうに笑っている気がした。

「だって」



賢治のまちから  
高校生★童話大賞

「ジイちゃん  
は僕のヒーロー  
ですから」。